

Goethe, Johann Wolfgang von

Zur Farbenlehre, Band 1-3.

Tübingen, J. G. Cotta, 1810. 3vols. 24×16cm. <K425. 7-G> 文献番号 9-9

ゲーテ, ヨハン・ヴォルフガング・フォン 『色彩論』

ゲーテ (1749-1832) はドイツの文豪として知られるが、自然科学者としても類まれな業績を残している。ゲーテはフランクフルトで生まれ、法律を志したライプツィヒとシュトラスブルグの大学時代は医学や絵画・建築にも取り組み、26歳でヴァイマル公国の要職を請われてからは農業・園芸・鉱業などに関与し、以後つきることのない好奇心で自然研究を深めていく。ゲーテの自然認識は終生変わることなく人間との相互関係を解くことにあった。彼の自然観察には美学と詩的感動が重なり、やがてその洞察から導き出された世界像によって、西欧の近代化に壮大な意義を与える思想家と評され、83歳で没した。

彼の色彩研究は40代からであるが、1791年から93年に『色彩論稿』を執筆、しかし彼の説は知己以外に自然科学者での賛成が皆無で、むしろ既に確立されていたニュートン説へのゲーテらしからぬ暴挙とみなされた。ゲーテにとっては光だけでなく、光ならざるものとして闇もまた実態であった。生命の根源にかかわる光を、単にプリズム操作で証明することこそが暴挙であった。ニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) の色彩理論が褒めそやされていることを難攻不落の古い城塞になぞらえて、「(世界の七不思議につぐ) 世界八番目の不思議」(第1巻緒言)と極言し、20年をかけて1810年に『色彩論』を刊行するに至った。

ゲーテは晩年に、数ある著作のなかで『色彩論』が将来最も重要な著作とみなされるであろうと予言した。そして今日、近代科学のもたらした自然破壊の危機が自覚されるなかで、この卓越した先験性が再評価されている。

ゲーテ『色彩論』は、第1巻『教示編・論争編』と第2巻『歴史編』および別冊『図版集』の3部構成である。この書はヴァイマルのルイーゼ大公妃殿下に捧げられた。

第1巻第1部・教示編(厳密には『色彩論稿案』)は、一般にゲーテの色彩論と呼ばれる部分で、6編に分かれる。

緒言に始まり、第1編『生理的色彩』は、自然の啓示を受ける眼を色彩論の根底に置き、視覚現象を精神作用にまで結びつけて洞察する。色を帯びた影や病理的色彩(色盲)はここに登場する。この章は特に色彩論の中核をなすとされ、現代の感覚心理学からもゲーテならではの業績と高く評価されている。

以下、第2編『物理的色彩』はプリズムを直接のぞいて「色は、光と闇、白と黒の間に生れる」との信念を明かそうとした観察実験(今日のいわゆる境界色)、第3編『化学的色彩』は色材、動物・鉱物・植物等の色彩現象、第4編『色彩論の概要』では色彩環を高昇という人間の心のありように結びつける。ゲーテのいうプラスの作用とマイナスの反作用

の分極性は後年ターナーの絵のテーマに現れる。第5編『隣接領域との関係』は「科学と芸術とが出会う地点に立ち」(750)*、高度の合一を呼びかけている。第6編『色彩の感性的・精神的作用』では、色相それぞれの作用を説いた上で、調和論として「眼が快感をおぼえる」(808)* 色彩環の両端の組合せ(いわゆる補色配色)、および特異な組合せとして6色の色彩環の一つ飛びの組合せ(いわゆる120°配色)を挙げる。

教示編で興味深いのは、付録の中で紹介される画家ルンゲ(Philipp Otto Runge, 1777-1810)の手紙である。彼はゲーテの色彩論と同年に球形の色立体を発表し、後にバウハウスのヨハネス・イッテンやポール・クレーに影響を与えた。画家の立場からここでは絵具の混色原理を綿密に語っている。

第1巻第2部・論争編は、厳密には『ニュートン理論の摘発』で、摘発という裁判用語を用いての挑戦的かつ執拗な論述である。ただしこの部分はドイツにおいてすら紹介される機会が乏しかったという。理由は後述の完訳版解説で前田富士男が「いささか単調、ときに煩瑣で冗長、パセティックにさえ感じられ、省略しても齟齬が生じるわけではない」と説いている。序文で意図を述べ、ニュートン光学・第1部は、ニュートンの言説を挙げてその一つひとつに反論、第2部で自身の実験を加えて反論を更に重ねる。そして結語において、ニュートンとその弟子たちが「私からも、より楽しかるべき数年間を奪い取ってしまった」との無念さをもらしつつ、歴史編の再開を伝えている。

第2巻の『歴史編』は色彩における歴史的資料と研究遺産の紹介で、目次だけでも100名近くの研究者が並ぶ。彼は序文で「この一巻を一種の文書館にしたい」と述べている通り、多数の色彩書を翻訳・抄訳あるいは原著を転載しながら考察し、さながら一大パノラマと呼ぶべき大作で、今日においても古い色彩文献の宝庫をなしている。

序文は太古の歴史から説き始め、第1部ギリシア人ではゲーテが決定的な影響を受けたアリストテレスを詳しく紹介する。以下、ローマ人でプリニウス等、中間時代(中世)でロジャー・ベーコン等、16世紀でテュレシウス等、17世紀にはガリレイ、ケプラー、デカルト、キルヒャー、ボイル等が登場し、第6部の18世紀に至る。18世紀は第2巻の半数頁を占め、前期と後期に分かれる。ニュートンの「光学」発行が18世紀初頭であったことから、前期はイギリスを中心に執拗な論述が展開される。後期は、ゲーテの立場に立ってブリーストリー(文献番号9-8)等の色彩研究成果を多数紹介している。

後書きは、宗教論争の形式を用いて「著者の告白」と題している。色彩研究の動機として「(美術家たちは)明暗、彩色、色彩の調和がいつもひとつの奇妙な円環のなかをばらばらに動き回っている」ために彩色の説明や法則性を求めた、と述べ、またニュートンの間違いを確信したプリズムにまつわるエピソードも詳しく綴っている。そして最後に、本書が印刷に4年を要したことから「約束していた補遺に代えて」を書き加えている。

ここに登場する文献は、ゲーテ自身の収集はもとより、多くの友人、ワイマールの図書館、ゲッティンゲン大学図書館等から入手し、大量に書き写された。この信じがたい執筆の持続力は色彩への想いの深さを表すが、万巻の読解力は、大学入学以前に父から受けた厳

格な語学教育（ギリシア・ラテン古典語，ヘブライ語，英・仏・伊の各国語）が素地にあって成しえたことである。

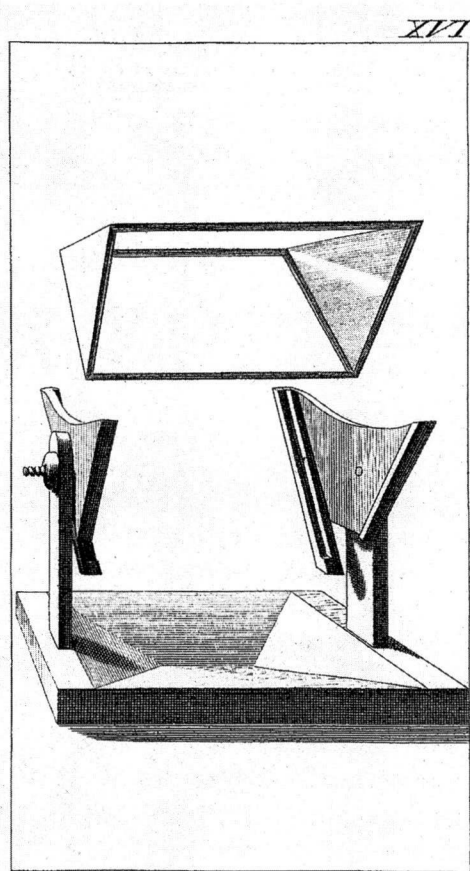
別冊（第3巻）は色彩論に添付された『図版集』である。図はIからXVIまでであるが，IIに記号aの図が加わり，合計17葉，それに図版それぞれの解説文が付されている。すべて銅版画で刷られ，白黒5図，水彩絵具による手着色が12図である。ゲーテは第1巻の末尾で「それ自体最も身近なはずの色彩という現象をたんなる描線と文字記号で表記しようとする態度が，従来はあまりにも著しい弊害を招いてきた」と述べている。発行後200年近くを経たからには多少の褪色は考えられるものの，いずれも端正かつ美的配慮のいき届いた画面構成である。

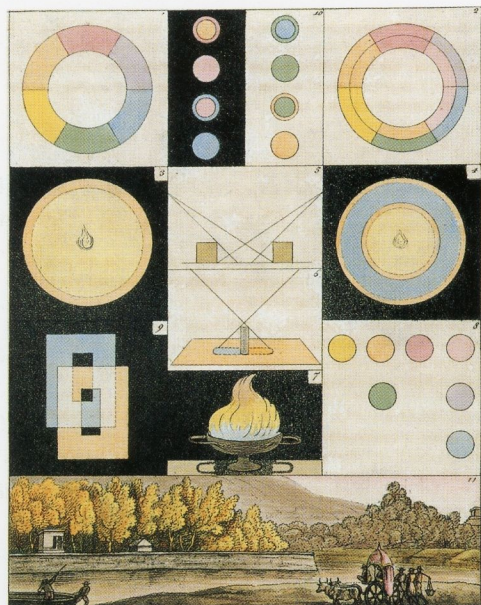
図版はゲーテ自身による実験結果を踏まえ，IからVIおよびXVIが教示編に，VIIからXIVおよびVとVIの一部が論争編に，そしてXIVが歴史編に対応する。よく知られた図I（口絵参照）は，ゲーテ独自の主張が11の絵で盛り込まれている。6色の色彩環で生理的に求め合うとする補色関係を示し，色のついた影が現れる装置，色弱者（ゲーテは青色色盲と呼んでいるが現在は俗に赤緑色盲と呼ばれる）の色の見え方などがここに描かれている。また図版の中には，XII（口絵参照）のような愛すべき楽しい小品が含まれている。これらはゲーテ自身が絵画においても優れた表現力を備えていたことを十分に物語っている。

本書の邦訳は，数次のゲーテ全集等で主要部分が紹介されてきたが，完訳版が生誕250年を記念して刊行された。全訳は難解なためか英・仏語にも存在しない。この書は文献リスト・索引・解説を含めて1300頁に達し，ゲーテ研究者と色彩研究者には欠かせない。当解題の基本用語と訳文の一部はこれより借用したが，謝してここに推薦しておきたい。ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ著『色彩論』訳：高橋義人・前田富士男・南大路振一・嶋田洋一郎・中島芳郎（工作舎発行，1999）（北畠）

注）*引用文「……」の後の（数字）は原文のバラグラフ

ゲーテが考案した水プリズムの作り方説明図
（図版 XVI）





図版集より図I

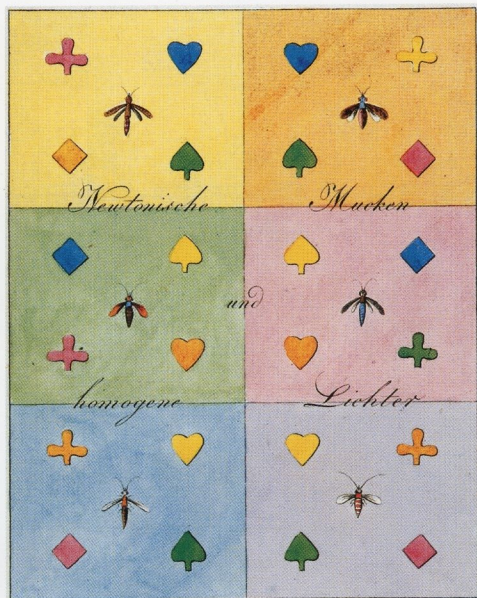
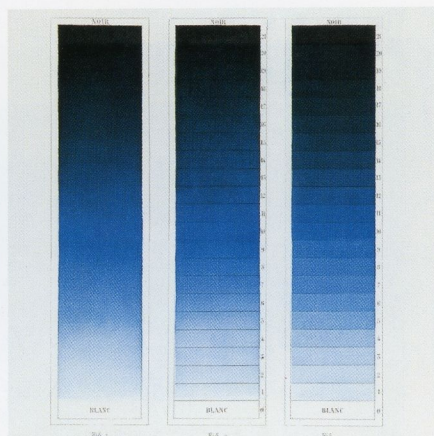


図 XII



色環図（純色，第1）



色調図（青における階調）



下降調（第2）



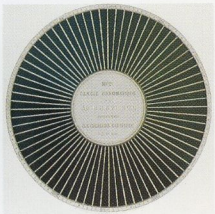
（第4）



（第6）



（第8）



（第10）